

ローゼンベルグ遺文

木 村 誠 司

I

1998年、コルマー・パウレンツ（Karénina Kollmar-Paulenz）とジョン・バーロー（John S. Barlow）により『ローゼンベルグとロシア仏教学へのその功績』*Otto Ottonovich Rosenberg and his Contribution to Buddhology in Russia*⁽¹⁾が出版され、早世したこの仏教学者への関心は、高まった。その後、日本でも、西村実則氏が『荻原雲来と渡辺海旭—ドイツ・インド学と近代日本』（2012）を著し、226-253頁で、ローゼンベルグを詳しく扱った⁽²⁾。ローゼンベルグ（O. O. Rosenberg, 1888-1919）の畢竟の名作『仏教哲学の諸問題』*Der Probleme buddhistischen Philosophie*⁽³⁾を通じてのみ、接し得た人物像が、この二著によって、随分とはっきりしてきたのである。

私は、『俱舍論』*Abhidharmakośabhāṣya* という仏教論書を細々と齧る身であるが、いつしか、この文献に命をかけたような、若きロシア人仏教学者に心惹かれていった。そんなわけで、『ローゼンベルグとロシア仏教学へのその功績』を、折に触れて、紐解いていた。就中、コルマー・パウレンツ「ローゼンベルグ執筆物の解説付き文献目録」Karénina Kollmar-Paulenz; An Annotated Bibliographical Account of O.O.Rosenberg's Writings なる小論があった。その67頁の脚注9,10には、昔、日本で公けにされたローゼンベルグの論文が二本示してあった⁽⁴⁾。周知のことだが、このローゼンベルグは、1912年（明治45年）から4年ほど、主に『俱舍論』研究の目的で、日本に留学していたのである。その二論文は、留学中の成果であろうか。私は、それほど期待もせず、掲載雑誌を手にした。すると、驚いたことに、ローゼンベルグ関連資料として極めて価値あるものだった。特に、雑誌の學界彙報には、ローゼンベルグ未亡人の手紙やら、ローゼンベルグの訃報を嘆く、恩師荻原雲来の弔文、当時の大仏教学者の思い出の記等が満載であり、ローゼンベルグによる日本語研究報告まで

載っている。その後わかったのだが、これらの文章は、小林潔(Kiyoshi Kobayashi)「ロシアの日本学者ローゼンベルグ日本見聞録」*Der russische Japanaologie Otto Rosenberg in japanischer Sicht* (2003)⁽⁵⁾というドイツ語論文で、言及されていた。恥ずかしいことに、私は、それを見落としていたのだ。ただ、小林氏の記述は簡便で、私の関心を十分に満たす情報は与えてくれていなかった。日露文化交流史からローゼンベルグを論ずる小林氏と、仏教学的関心から見る私とは、方向性も違うように思われた。

さて、『ローゼンベルグとロシア仏教学へのその功績』は、ローゼンベルグ研究として最も充実した書物であるし、様々な角度から、ローゼンベルグに光を当てている。だが、その目線には、日本はない。パーローの序文は、彼らの関心のあり様を明確に示している。彼は、こういつている。

この小著は、ロシア人学者ローゼンベルグの生涯と時代に関するものであるが、上に点描した情況に鑑みて、2種の目標を追っている。何よりも最初に、英語を話す国々、いやロシアでさえも、そしてドイツでも比較的無名なこのロシア人学者の作品に、英語圏の学者の注意を喚起することを願うものである。その仏教哲学についての作品は、今尚、西欧仏教学に一時代を画すものだと思われる。今日、彼の先駆的作品は、仏教学にとって重要であるばかりでなく、仏教学研究史にとっても重要であると考えることが出来る。仏教学は、最近、提示されているように、ローゼンベルグと同時代人によって成し遂げられた研究に土台を置いているのである。だからこそ、我が目的は、この小著をこの輝かしくも、不当に忘れ去られた学者の記憶へと捧げられるものなのだ。ロシアのみならず、ヨーロッパの仏教研究が、多くを負っているその人に。第2に、新規の仏教学研究センターに読者の関心を引きたい。そこは、本当に極最近、ロシアに設立されたばかりなのである。長すぎる中断の後、そのグループは、世紀の変わり目に末期20年まで活発に追求されたロシア仏教学を継ぎつつある。彼等の先達の研究は、西欧仏教学にすこぶる重要なものであることは、論証されているのだから、現代ロシア仏教学者は、必ずや、進行中の仏教学の学術的議論を豊かにするだろう。編者の考えでは、彼らの研究成果は、英語圏の学友が知らないでは済まされぬ。言葉の壁で、ロシア仏教学研究は、英語圏では、比較的、知られなかった。多くの学者は、ロシア語が読めない。だから、その国で達成された研究を知ることもない。そういうわけで、この書は、英語圏の学者とロシアの学友との「理解の架け橋」たらんとしたい。ロシア人の研究成果は、ほとんど、ロシア語で公刊されているのだから。⁽⁶⁾

彼らの目は、このように、ヨーロッパ・アメリカ、そしてロシアに向けられているのである。日本のことなど二の次だ。しかし、ローゼンベルグが4年間暮した日本での足跡は軽くない。私は、少し前から、伝統的『俱舎論』研究に興味を抱いてきて、日本でのローゼンベルグの行状にも目配りはしてきたつもりなのだが、この度目にした雑誌については、知らないことばかりだった。お蔭様で、個人的興味は十分満足したけれど、内容を広く宣伝する必要性を強く感じた。そうすれば、ローゼンベルグの研究者達が、もっと日本に目を向けるようになって、更なる資料が発掘されるかもしれないと思ったわけである。強いといえば、そんな小さな希望が執筆の動機なのだ。

II

掲載雑誌は『宗教研究』第三年 第十二號、1920（大正9年）と『現代佛教』三月號、1925（大正14年）である。前者にはオー、ローゼンベルグ「俱舎論研究に附して日本學界に望む」（81-107頁）があり、後者にはローゼンベルグ「日本の佛教」（42-70頁）が載っている。「日本の佛教」は、ローゼンベルグのロシアでの講演録「極東における現代仏教の世界観」The World-View of Contemporary Buddhism in the Far East のことで、これは、『ローゼンベルグとロシア仏教学へのその功績』中にロシア語から英訳されている（pp.21-47）⁽⁷⁾。日本の雑誌掲載のものは、ドイツ語訳からの和訳である。内容は、仏教全般の思想的意義を論じた含蓄の深いものである。「俱舎論研究に附して日本學界に望む」は、分野を限ったもので、当時の『俱舎論』学者を正面切って、逐一批判するという意欲的な論文である。私に取り上げようとしているのは、『宗教研究』第三年 第十二號、1920（大正9年）の學界彙報に載った数々の記述である。恐らく、一読すれば、資料的にも貴重なものだと、直感出来るはずである。そして、愛惜の念を禁じえないであろう。以下に、若干の補足を添えて、あれこれを紹介してみよう。學界彙報は、先ず、恩師荻原雲來の「オ・ローゼンベルグ氏の訃」という文章から始まる。次のようなものである。

往年日本文學特に日本佛教研究の目的を以て、露國よりの留學生として來朝し、東京帝國大學に在りて孜々研究を重ねつ々ありし同氏は這次大戰の央に歸國し、ペテログラド大學の教授たりしが、昨年末バヴロヴスクを、遂はれたたれば、フィンランドに至り、夫より米國を経て我國に來らんとする途中レブルに於て猩紅熱に罹り

僅か十二日の病臥の後、三十二歳を一期として終に不歸の客となれりと云ふ。痛惜の至りに勝へず。氏は梵漢の語に通じ西藏文をも讀み、佛教哲學に大なる興味を有し特に俱舎論の研究の如きは、氏の最も多く力を用ひたる所にして、犀利の眼光紙背に徹し本邦専門家の舌を卷く所なり。氏は本邦留學中専門研鑽の傍ら、佛教研究名辭集を編成し、また漢字書の文字搜索の便法を按出し、五段配列漢字典を作れることは人の知る所なり。氏は歸國後尚ほ俱舎論の研究を進め、チェルバトスコイ教授と俱に漢譯俱舎論の露譯と英譯とを計畫し、又自ら俱舎哲學體系論を著す豫定なりしも果さず。氏の遺業としては前掲二書の外に一昨年脱稿せる佛教哲學の問題てふ一書あり、こは露語なるを以て未亡人が目下其の獨逸語譯に従事しつゝありと云ふ。稀有の天才を半途にして我が學壇より奪い去らるる獨り遺族の不幸のみならんや。⁽⁸⁾

荻原の弔辭は、彼に宛てたローゼンベルグ未亡人の書簡に基づくところが多い。最後まで、ローゼンベルグと共にあり、その死後は『仏教哲学の諸問題』のドイツ語訳に尽力して、ローゼンベルグの名を高めたのは、偏に、未亡人の奔走であった。その点は、『ローゼンベルグとロシア仏教学へのその功績』所収のパーローの論文「ローゼンベルグ（1888-1919）：輝かしき若きロシアの仏教学者」Otto O. Rosenberg (1888-1919): Brilliant Young Russian Buddologist の目玉でもあり、62-63 頁に詳しい。その末尾には、彼の調査記録結果が披瀝されている。

私の次なる探索は（1995年の春遅く）ヘルシンキ市保管文書にエルフリダ・ローゼンベルグの情報を得るためのもので、鍵となるような補足情報もたれされた。1888年（夫と同年）、10月15日、パヴロヴスク（エルフリダ・ローゼンベルグのシチェルバツキー宛の手紙によれば、彼等が去り、ユデニッチ退却軍と共に逃亡する前にローゼンベルグ一家が住んでいた所）生まれ、結婚前の名は、ワグナー（ドイツの名）1912年（同年ローゼンベルグ4年の日本滞在に出発、シチェルバツキーへの別な手紙によると、彼女は、日本で、彼のやっかいな手書き原稿に馴染んでいた）4月5日結婚、1922年9月5日フィンランドの小さな町からヘルシンキへ引越し、1953年に亡くなった。エストニアからフィンランドにいつ着いたかを示すものは何もない。彼女が『仏教哲学の諸問題』のドイツ語訳に取っ掛かり始めたのが、1920年、恐らく、その年だと思う。この補足的な資料は、結果的に、ローゼンベルグの『仏教哲学の諸問題』（ロシア語から）ドイツ語版の訳者、つまり、E. ロゼンベルグ夫人とは、エルフリダ・ローゼンベルグだったことを明確にした。そして、このオットー・ローゼンベルグの未亡人、約300ページ—台北版も同じ—

の著作は、亡き夫へ彼女が残したものだということが得心いったのである。⁽⁹⁾
バーローは、このように実地検分も踏まえて、ローゼンベルグ未亡人の姿を迫っていくが⁽¹⁰⁾、これから引用する未亡人の書簡については、何も言及していない。バーローが知れば、狂喜したであろう資料を學界彙報から、抜き出してみよう。

拝啓、私の良人ドクトル・ロゼンベルグ教授は一千九百十九年の十一月二十六日に、猩紅熱のために、レブルに於て、三十二歳を一期として死亡致し候につき茲に御通知申上候。私共の居住致し候彼得堡〔ペテルスブルグ〕の近郊なるパヴロウスクを西北軍の自衛聯隊が占領致し、直に退却は致し候ひしも、良人と私は一千九百十九年の十月二十三日に僅かばかりの手廻品を持って三十キロメートルを徒歩し、其よりは鐵道にてエストランドに逃れ申し候。私共の心算にてはフィンランドに到り、其處より米國を経て日本へ參るべかりしに、良人はレブルにて發病致し候、差して重態には之なく候ひしも甚しく落膽せしたため病臥十二日にして永眠致候。折も折二ヶ年間の辛酸を舐め 僅に待ち焦れたる自由の身となりし此の際に死亡するとは！私共は大いに將來に望を屬し居り申候。良人は日本より通信を得やうとは全く豫期し居らざりき。私は良人の懷中に、貴殿に送らんとして病院にて認めかけたる書面を見出し申候。其書面には、貴殿の俱舍釋論の梵本の第二章の寫本を無事に領収し、且つ已に其一部分を印刷し始め申候。第一章は前年已に完成致し候。現今は共產主義者の天下となり、學術上の著作はとても印刷することは出來申さず、凡て眞面目の文化的事業は廢せられて、總てが次第次第に破壊せられ申し候、大學も中學も苟も學術的又は文化的の價値を有するは悉く此の運命に遇ひ申候 と記しあり候。良人の學位論文は幸いにして一千九百十八年に印刷を了し此を保存することを得申し候。开は佛教哲學の問題と云ふ題號にして世人の大なる注意を惹き、二ヶ月内に賣り切れ申候。露國に於ける佛教の趣味は斯くも大なるものに候。勿論露語にて著作致し候も、良人は直に此を獨英兩國語にて記述せんと企て候も不幸にして素志を果し得ず候。良人の歿後、私は親戚の居るフィンランドに參り、茲處にて其の獨譯を始め申候。併し黨地にては相談對手になる人とても無く、私にとりては困難の事業に候。加之ならず専門の學術的書物は絶無に候。須要の品は一切注文して取り寄せねばならぬに私は殆ど収入の途なく、されば此の仕事は私に取りては費用の大きに閉口致し候。私は目下何なりとも相當の職を求め居候。未だ其の口なく且つ當地の諸物價は非常に高く候。良人の書物は判の紙にて三百六十七頁あり十九章より、成り、注記と引用書目録と索引とを附し、只今第四章まで進み申し候。日本の状態

は如何に候や、御通信願度候。日本は私の生涯中最も幸なる時を過したる處にて、私の第二の故郷に之あり大に懐しく存じ居候。若し私に御書面下されて、貴殿及び御家族の現状を御報せ下され候は、非常に喜ばしく存じ候。皆様多分御壮健の事と存じ候。良人の知人や助手の方々は如何に暮され候や。池田、伊東兩氏は云何に。ドクトル渡邊は何を爲され候や。良人が彼の新式の大字書の印刷を完成し得ざりし事は非常に惜しく存じ候。此を如何になすべきや全く豫想以外に候。私の唯一の希望は、私講師エリセエフ氏が、如何にかして、露國より救い出されて而して日本に至りて良人の事業を繼續し呉るゝことに候。さり乍ら若き妻と二人の幼児とを携へて此の冬の季節に國境を超へ出るとは只に困難のみならず實に危険極まることに候。且つ又たエリセエフ氏は近頃の險惡なる時期に際して健康を害せられ候。此の冬に彼得堡に於て生活を營むは非常なる難事にて、煖氣を取るべき材料も無く、且つ死亡するもの甚だ多く之あり候。營養不足のため人は瑣細の病に殫れ、今後如何に成り行くや逆賭致し難く候。貴下の通信を待ちつゝ、貴殿並に友人諸氏への衷心の御挨拶を致して、謹みて白す。

一千九百二十年二月廿九日

フィンランド、ギボルグ、グラムンケガタン第五番

エルフリーデ、ロゼンベルグ⁽¹¹⁾

萩原宛の書簡であるが、心情切々として、胸に響く。エルフリダの手紙にある池田という人物は、多分、池田澄達のことであろう。『初等西蔵語読本』等を著した、日本チベット学の先達である。その池田も、追悼文を寄せている。ローゼンベルグの日常の姿が、仄見えて、中々面白いものである。

此頃露國から萩原先生へ來た手紙を見ると、イー・ロゼンベルグといふ人から出たのである。先に日本にゐた人はオットー・ローゼンベルグであるが、これは誰だろう。こんな名の學者もあるのだろうかと思ひ、別に氣にも留めずにゐた。然るにこれは氏が第二の故郷である日本へ來やうとして、途中で死んだのを妻君から先生に知らせて來たのであつた。氏は、明治四十五年五月廿五日近角常觀師に伴はれて始めて大學に來たのであつた。其時既によく日本語を話したが、姉崎先生には流暢な獨逸語で話してゐた。僕は其獨逸語を氏から學びたいものと思ふたので、氏に日本語を教ふる約束をスグ其場でしたのであつた。爾來一週三回、氏を訪ねたこと半歳餘、越えて大正三年氏が佛教名辭集の編纂に従事し、殊には其副産物として漢字を五段に配列する新考案が成つた時、僕は氏に此出版を勧めたので、兩方の用事で氏は毎月僕を訪ねたこと四五回が普通であつた。夏の夕飯後、僕が散歩にでも出たあとで

あると、氏はチヤンと日本式に座り僕の母と話してゐた。又僕の母とは折々芝居で落合ひ一緒に見物したこともある。こんな関係で僕の母は氏丈けは外國人のような気がしないといふてゐた。僕が氏の訃を傳へたら母は涙を流して泣いた。露西亞があんな騒ぎでも、あの方丈はどうか達者で置きたいとは常に母の言であつた。西洋人で佛教を知る人は氏以上にあるかもしれない。併し短日月で氏程よく日本を了解した人は少ないと思ふ。氏は學生として來た爲め日本の家庭によく出入した。又自分の家にゐたときは疊の上に臥、米の飯を食ひ、味噌汁を吸ひ、漬物を食ひ凡て日本風の生活をしてゐた。僕は此の意味でも氏の訃を悲む者である。氏は本年達者でゐても日本流に數へて三十三歳にしかならない。私は子年ですとよくいふてゐた。だから氏が始めて日本に來た時はまだ二十五歳の青年であつたが、英・佛・獨・ラテン・グreekは勿論、巴利語・梵語・西藏語もやり漢譯の經文は僕等のやうに、ひつくりかへらずに棒讀をして意味を了解してゐた。朝鮮も少しやり日本語も、來た時既に僕等と大抵までは會話が出來たのである。同一漢字でも支那朝鮮日本と發音を異にするが、若し此三ヶ國の音を列べて見ると日本で例へば蝶にテフと假名をつけるが如きよく了解されるなどといふてゐた。此驚くべき語學の天才が而も年少で今後ます―佛教を研究し、これを歐州の學者に傳へたなら學界に貢獻する所は随分偉大なものであつたろうと思ふ。此點でも氏の訃は實に惜しいのである。よし此二つの特徴がなくとも、氏は友として厚く僕も母のやうに外國人のやうな気が少しもしなかつた。なんだか氏の死は、うそらしく思へてならないが事實なのであろう。もう遇へないと思ふと悲しくて仕方がない。⁽¹²⁾

池田の母との交流⁽¹³⁾など、ローゼンベルグの人と成りが伝わる。心情溢れた追悼文である。學界彙報には、他にも、高楠順次郎や宇井伯壽等の、錚々たる學者の文章がある。そのすべてを、採録するが⁽¹⁴⁾、本文では、日本における宗教学の創始者と目される、姉崎正治の追悼文を引用しておこう。そこには、ローゼンベルグ自身の日本語による「研究報告」が含まれている。

ローゼンベルグ君の大學院研究について、僕は指導教授ではあつたが、自ら指導するといふよりも、指導者や相談者の事を案配し紹介するにあつた。第一に勧めたのは、八宗綱要の講讀で此は島地君に頼むだかと思ふ。それから専門的に俱舍唯識の研究には、荻原君に依頼した。在學一年で日本語と漢文佛典との學習は長足の進歩を遂げ、殆ど獨立に研究し得る様になつて居た。戰時中、革命後、君が種々の困難を排して歸國したについては、革命擾亂中のロシアに歸るよりも、今一つ日本に踏留まつてはどうかとも、君に話したが、君は革命後の新ロシアで働きたいとの考が

盛であり、又ペテログラード大學からも歸るべしといはれるから、困難に關せず歸國するといつて日本を去つた。併し、二三年の後には研究の結果、論文を纏めて再び來るといふので僕は、イワノフ教授（彼の學部長）に證明書風の手紙をつけ、再來の希望を果させてくれと云つてやつた。然るに、ローゼンベルグ君の再來は肉體の生存中には來らず、却て訃音となつて現れた。自分は上に述べた如く實質的に指導したのではないが、君を世話して見て、實に世話のしがひのある有望な學者として君の前途に對して、他人ならぬ思ひをして居たのである。其他の事は他の人々の追憶と重複を避ける爲に、敢て述べないが、君が研究報告の一（日本語自書）を記念として左に掲げる。

大正二三年度研究報告

東京帝國大學院學生

オ・ローゼンベルグ

前年度に於ける小生の研究は其中心を『ワスバンド』の哲學に有せり。即ち俱舍唯識兩論の解説と露西亞文への翻譯とにして未だ結了に至らず。前期研究の際、小生は梵漢の諸著と最近の日本出版の著作を比較したるに一致せざる箇所少なからざることを發見せり。小生は之を疑問として其重なる者を一括して各専門家の座右に呈して解釋を乞はんと欲し本年春、別冊を作りたるを以て茲に添附して提出せり。該冊子の原文は獨逸文なるを以て荻原講師に請ひて翻譯したる者なり。前述の次第により尚本學年も在院許可を願上候。

大正三年九月廿一日⁽¹⁵⁾

文語文を使いこなした見事な日本語である。

III

先に名を挙げた論文にも、その紹介者の一文が付されている。「俱舍論研究に附して日本學界に望む」には、渡邊樞雄のまえがきがある。

ローゼンベルグ氏がペテログラード大學から派遣せられて我東大大學院に來り漢譯佛教の研究に従つてゐたのは恰も予等の學生時代で有つた。その後、氏は戰爭勃發時に歸つて行つた。私は今でも氏の若々しい而も學者らしい風姿をあり〜と想ひ浮べることが出来る。此の稿は氏が日本を去るに臨んで、在留中の研究を纏め一小冊子に作つて、我が大小の學者に送り、その意見を徵せんとしたもので、私は之を畏友文學士池田澄達氏から見せて戴いた。横風な口をきくようだけれども、私は研究そのものに至つては必ずしも特に推賞を價する何者をも見出さなけれども、外

人にして漢文を涉獵し此の稿を成したその心術に至つては正に私の最も歎じた所で
有る許りでなく、之の序論の中に述べている所は正しく外人一般の我一般佛教學界
に對する要望を代表するものと見て差間違えないと思つたし、殊に著者自身が批評そ
の他我學人の意見を聞きたいと言つてゐるのだから、機を得て一般に公表したらと
考へ、私かに池田君に許を乞ふたら、それこそ口氏の本懐で有ろうといつて氏も之
に賛成して下されたので、本誌を假りて此に江湖の一讀を願つた譯で有る。思ふに
今時露國の大勢は容易に明日を計り難い有様なことから、口氏の大きな研究も今は
恐らく殆どその用をなさぬことで有ろう。姉崎教授は佛國から歸朝された當時或は
餓え死んだかもわからないといつて、此の氣の毒な學究の身の上を案じてゐられた
が、それ程の不幸は幸いに無からんことを祈としても、何れにしても不遇に違ひな
い學人の我國に遊んだことを記念するためとしても、此の稿を本誌に依て公表する
ことは宛ち徒爾では有るまい。諸君子幸いに口氏の心を想ひ、所有機會に於いて氏
の要求する所の意見を述べて下さるならば私の婆心の至福とする處であるが増して
我學界炯眼の士多しとは言え、又數々老婆信仰に障えられて眞實佛教の學術的闡明
を怠るものも無いではないから、かゝる人々に對して幾分でも眼を世界に開き、心
を眞理の愛好に趣かしむる資助を供するものが有れば、私の幸いの之に過ぎるもの
はない。敢えて此の稿を江湖に薦める。—大正九、四、二八一渡邊棟雄誌⁽¹⁶⁾

渡邊棟雄が、このまえがきを認めた時点では、ローゼンベルグの訃報は伝わつ
ていないようである。しかし、二ヵ月後の初校正の時には、ローゼンベルグの
死は知られるところとなった。渡邊は、こう付記している。

右の文はローゼンベルグ氏自ら草し、人をして書せしめた所である。故に出来るだ
け原のまゝにして置いて無闇に改めるなどのことは避けた。その標題に關しては私
が私意をもつてつけた所で全責任は私にある。尚私が本篇の序文を草して後幾何も
なくして、氏の夫人から氏の訃音が飛來した。此の稿も結局氏を弔ふ一文になつて
しまつた譯である。終わりに氏の在天の英靈に對し恭しく敬意を表する。—六、一
二、初校正の日、渡邊棟雄—⁽¹⁷⁾

渡邊は、まえがきで「内容的には評価しない」というような記述をしているが、
具体的な指摘は行っていない。今日、ローゼンベルグの主著『仏教哲学の諸問
題』が絶賛されていることを思えば、渡邊の忌憚のない批評は欲しかった。渡
邊の専門分野は、ローゼンベルグのそれと見事に重なるので、その想いは一層
つのる。渡邊には『有部阿毘達磨論の研究』という大著があり、詳細な研究を
残している。その著書に渡邊の不満の素は見出せそうである。恐らく、それは

両者の研究スタイルの違いに起因する。以下に、両人の違いを示す文章を抜粋してみよう。先ず、ローゼンベルグは、あくまでも思想解釈を優先するように見える。件の論文の末尾ではこう述べている。

日本に於て小乗哲學が獎勵せられざる理由は全く歴史的に了解せらるべし。その古代の傳説はとく已に失はれ、近世に於ける俱舍研究の中興たりし人々及びその人々の傳説の源泉も共に不明なり。船橋氏の著せる興味ある集録によれば、世親が何れの宗派に屬せるやの問題につきましては知名の學者間に於てすら意見一致せずと。斯くして彼の難解なる本文を理解すること能はざるに至りしと雖も、是誰をも罰すべしに非ず。但し最も簡單なる根本思想すら、所見一定せざるに至りしは果たして何時の時代よりなるかを歴史的に又哲學的に、その根據を明らむるは興味あることなるべし。⁽¹⁸⁾

これに対し、渡邊は、思想以上に文献研究を強調して、次のように述べる。

現段階における佛教研究となれば、何をおいてもまず問題なのがその資料論である。而もそう資料論が問題であるとなれば、ふたたび何をおいても問題のはずなのがあたえられてたる諸佛典の、かくあるままの分析的、解剖的研究これではなげばなるまい。それにもかかわらず、現實における東西佛教學界なる諸研究は眞實そうなつていであろうか。卒直なところは、東西大方の學者らは、一切の佛教研究は所詮その佛教なる一大思想體系に關する研究のみなることにあまりに多くとらわれすぎてしまつて、ときにはしばしば全くの超絶的に、あたえられたる佛典のいかにして成立せるかなどにひたすら焦心して、そうした脆弱きわまる資料論上に黨該佛典なる組織・研究をあえてしている實状であるから、畢竟じてすでにいつた東西哲學史上なる古代の哲人らに見られる驚愕と困惑、それにも彷彿たるものは現代佛教研究上にもみとめられる感なきにしもあらずだらうではないか。⁽¹⁹⁾

渡邊がローゼンベルグを「評価しない」と言い放った背景には、上のような研究スタイルの相違があったと思われるのである。

さて、「日本の佛教」は寺崎修一という人が訳したもので、そこにもまえがきが附されている。合わせて、紹介しておこう。

本文はロシアの佛教學者、故オットー、ローゼンベルグ博士が、千九百十九年、時の露都ペテログラードに於てしたる講演の抄譯である。博士は殊に俱舍論の研究者として有名であつて、そのためには懇々我國に來り、前後四年間滯留し、その傍ら佛教名辭集の編纂をした程の篤學者であつた。大戦中餘儀なく歸國し、首都にあつて、大學の教授にもなつたが、革命勃發のため、去つてフィンランドに遁れ、米國

を経て再び日本に來り研究を続けようとした。然るに不幸猩紅熱に罹り、遂に僅か三十二歳を一期としてこの世を去つた。時正に千九百十九年十一月二十六日。自分のこの試みは、佛教學界多事の際、惜しむべき天才を抱いて逝いた博士を追憶し、併せて歐州佛教學者の日本佛教觀を紹介するためであるが、只恐るゝは、不文拙才を以て鳥辭がましくも、獨乙譯を重ねて抄譯せるため、原意を傳へ得ぬ點もあろうかという一事である。但し自分に出来る限りは私意に依つて原意を枉げぬ様にと努めたことだけは豫け御承知置きを乞う。— Otto Rosenberg. Die Weltanschauung des modernen Buddhismus im fernen Osten. (譯者註)⁽²⁰⁾

IV

この寺崎のまえがきで、私の瞥見した資料報告は終わりである。非業の死を遂げた、『俱舍論』研究者の関連資料を集めただけの雑文に過ぎない。このような学的考察を欠いた文章は、多分、ローゼンベルグが最も嫌うはずのものであろう。しかし、私が自説を提示するようなものを著すなら、きっと、彼とは意見が異なるはずだ。泉下の彼を傷つけるつもりは毛頭ないけれど、私は、ローゼンベルグの仏教理解には問題視すべき点もある、と思っている。ここでは、幾分長い注記を付し、全面的な批判や考察は、今後行うことにしたい⁽²¹⁾。それが達成出来れば、せめてもの供養となるだろう。

注

- (1) 書誌的情報を付加すると、1998, Wien, WSTB (Winer Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde) 41 である。
- (2) 同氏の著書は、西村実則「荻原・渡辺とローゼンベルク（正）」『仏教論叢』48, 2004, 同「荻原・渡辺とローゼンベルク（続）」『佐藤成順博士古稀記念論文集 東洋の歴史と文化』2004 がベースとなっている。著書では、注が省かれているが、論文には詳細な注が付されている。
- (3) 元々はロシア語で著されたものだが、ドイツ語訳されたことで、広く知られるようになった。佐々木現順『仏教哲学の諸問題』1967 として、ドイツ語からの和訳本がある。ちなみに、佐々木氏は、ローゼンベルグをこう讚えている。

原書が初めてロシアで出版された頃の我国の学界をかえりみる必要がある。その頃の学界—私の経験する領域内であるが—はまだ漢訳中心であり、而も、伝統一我国だけの—に従って、アビダルマ仏教を研究しており、その研究も仏教術語の基礎的知識を了解させるためという全く手段的役割しか持たされていなかった。その頃、若き学徒の思想的憧れをみたしてくれる著書は微々たるものであった。

仏教に限らず、思想を求め、人生の根本問題を追求しようとする者は所詮、外国文献を通して、仏教をみなおそうとしたのではなかったかと思う。…本書は学問的息吹きと魂をこめた珠寶であると信ずる。…現代に於ても、文献的にも哲学的にも本書ほど着実な方法論を以って書かれている仏教書は決して多くはないと信ずる。…以上の理由で、碩学の名著たる本書は現在、なお欧米諸学者により頻繁に用いられ、常に新しい曙光を与え続けて来た。(佐々木訳本、pp.309-311)

- (4) その脚注には、ボン大学のナランゴア・リ (Ms.Narangoa Li) 女史により、日本語タイトルのローマ字化がなされたとある。
- (5) Kiyoshi Kobayashi: *Der russische Japanaologie Otto Rosenberg in japanischer Sicht, Japanese Slavic and East European Studies*, vol.24, 2003、この論文はネットで拝見した。オットー・ローゼンベルグで検索すると、直見つかる。
- (6) Karénina Kollmar-Paulenz and John S.Barlow ed., *Otto Ottonovich Rosenberg and his Contribution to Buddhism in Russia*, 1998, Wien, pp.VII-IX。
- (7) 同書についてパウレンツは、「サントペテルスブルグでの最初の仏教博覧会で、ローゼンベルグは、有名な講演を行った。それは同年、出版された。〔「極東における現代仏教の世界観」について。後援者ローゼンベルグ、第1回サントペテルスブルグ仏教博覧会で読み上げる。芸術および古代遺物収蔵博物館部により出版、1919年、サントペテルスブルグ、77ページ〕(本文で挙げたパウレンツ論文 pp.66-67)。」と述べる。

ローゼンベルグの名はないものの、この博覧会の様子は、次のように示されている。1919年パテログラード [=サントペテルスブルグ] にて、第1回仏教博覧会が開かれた。その発起人オルデンベルグ [S.F.Oldenburg, 1863-1934] と同僚達は、情況が困難を極めている時に、この博覧会が準備されているのだと、よく弁えていた。しかし、彼らは、それを意義あるものとし、インドへの関心、古代文化、そして東洋一般への関心を沸き立たせようと躍起になった。博覧会の開演に用意されたカタログに、オルデンベルグは、こう記している。「今日の人類、それはまだ脆弱で、成熟していませんが、国家の絆を求めています。それには、人類が、この点に関し、既に成し遂げたことを出来る限り知ることが肝要なのです。つまり、仏教世界の研究・理解は、我々にとって、そのような重大な意義を持っているのです。本博覧会は、それを手助けしてくれるはずです。」学士院会員オルデンベルグ、ヴラドミルツォフ、シチュエルバツキーは、博覧会で、公開講演を行い、インドや仏教の研究の重要性を強調し、インド文化の遺産の詳細な研究を訴えた。(G.Bongard-Levin & A.Vigasin; *The Image of India, The Study of Ancient Indian Civilisation in the USSR*, Moscow, 1984, p.122、〔 〕内私の補足)

また、パウレンツは、ローゼンベルグの処女作についてこう述べている。「私の知る限り、ローゼンベルグの最初期の論文は、小論「仏教体系とダルマ理論、世親哲学への序章」である。本来は、『俱舍論』翻訳プロジェクトのはしがきとして計画されたものである。彼は1912年にこの論文を書き、翌、1913年、東京ドイツ協会の年報で発刊された。」(パウレンツ論文 p.65)

ここで触れられている『俱舎論』翻訳プロジェクトについては、いくつかの報告があるので、合わせて、紹介しておこう。『ローゼンベルグとロシア仏教学へのその功績』の序文では、こう述べられている。

1912年、シチエルバツキーは、世親の『俱舎論』研究を行う国際的学者グループを作り上げた。このグループには、著名な学者がいる。フランスからはシルヴァン・レヴィ、ベルギーからはド・ラ・ヴァレ・ブサン、日本からは荻原雲来、イギリスからはデニソン・ロスである。シチエルバツキー自身は、『俱舎論』チベット語テキストを発刊し、ローゼンベルグは、ベルリンとボンでランゲ教授とヤコビ教授に学び、このプロジェクトにも関わっていた。(preface, p.vii)

また、故江島惠教氏によっても、以下のように言及されている。

なお、この計画推進にあたっては、日本における伝統的な俱舎学がいつも参照されるべきことを強調している。その情報源は当時カルカット大学講師だった山上曹源であった。その後、第一次世界大戦、ロシア革命、さらに第二次世界大戦を迎えるが、それでもこの計画はけっして頓挫しなかった。(江島惠教「『俱舎論』サンスクリット・テキスト校訂について」『仏教文化』22, 平成元年, p.2)

このプロジェクトの最も詳細な報告は、山口益・船橋一哉『俱舎論の原典解明 世間品』昭和30年、緒言、pp.1-13である。そこでは、事の顛末が一部始終報告されている。

- (8) 『宗教研究』第三年 第二十號、1920（大正9年）、p.108、前掲注(5)の小林論文 p.93, p.99の注20等に記述あり。
- (9) John S.Barlow; Otto O.Rosenberg (1888-1919): Brilliant Young Russian Buddhist, Karénina Kollmar-Paulenz and John S.Barlow ed., *Otto Ottonovich Rosenberg and his Contribution to Buddhology in Russia*, 1998, Wien, p.63.
- (10) バーローが、このような調査に踏み切った背景は、彼の前の論文にある。バーローは、サンクトペテルスブルグ大学で、ローゼンベルグの同僚であったニコラス・ポッペ (Nikolas Poppe, 1897-1954) にインタビューするが、その際の会話が混乱を生んだのである。その部分を抜粋してみよう。

1987年3月に、ポッペ教授と長電話した。彼は、ローゼンベルグの博士論文のドイツ語訳が、E.Rosenberg 婦人であることに気付かないでいた。私は、彼にローゼンベルグの妻について聞いてみた。彼は、かつてローゼンベルグと一緒に婦人を見て、シチエルバツキー教授（ローゼンベルグの師）に「彼女は誰ですか？」と尋ね、シチエルバツキーが「あれは、ローゼンベルグ夫人だよ。」と答えたのを思い出した。別な機会に、私は、ポッペ教授にローゼンベルグ夫人のファーストネームを覚えているかと聞いてみた。彼は、直には、思い出せなかった。しかし、他の話題の数分後、彼女の名前はエリザベート (Elithabeth) だった思い出した。(J.S.Barlow, *The Mysterious Case of the Brilliant Young Russian Orientalist*, *International Association of Orientalist Librarians, Bulletin*, 41/42, 1995-1996, p.34)

このような名前の混乱が、バーローの調査の動機である。この混乱に基づいて、バーローは、Eithabeth Rosenberg というドイツ語・ロシア語のバイリンガルの女性に

ついでに、バーローとはどのような人物なのか、紹介しておこう。この注にある論文の冒頭には、出版者の紹介文がある。以下のようなものである。

バーロー医学博士は、ハーバード大学の神経学上級研究協会にあり、医学部の1員である。また、マサチューセッツ総合病院とマサチューセッツ工科大学で職を得ている。彼のロシア語及び他言語の知識、そして、辞典に対する関心は、スタンダードな『中・露辞典』に英語の記載を加えるに至った。3カ国語用の本は、ハワイ大学出版により、1995年に『中・露・英』辞典として刊行された。それは、ローゼンベルグがまとめた図式システムなのである(ムルドフの『中・露辞典』英語テキストと補遺付きによる)。バーロー博士は、辞典の序文と補遺で、どうしてそれを作るようになったのかについて、そして、ローゼンベルグの漢字整理法システムについても、多くの情報を提供している。辞書を作る過程で、バーロー博士は、ローゼンベルグその人についての情報を探るようになった。(J. S. Barlow, *The Mysterious Case of the Brilliant Young Russian Orientalist*, *International Association of Orientalist Librarians, Bulletin*, 41/42, 1995-1996, p.24)

こうして、ローゼンベルグと縁もゆかりもないバーローが、その足跡を追い出すのだから、面白い。

- (11) 前掲注(8)の『宗教研究』pp.112-113, []内は私の補足。実際には、ローゼンベルグの死亡状況もはっきりせず、色々な情報が飛び交っていたらしい。例えば、バーロー論文はこう伝える。

いくつかの伝記的記述は、ローゼンベルグの生涯についてかなりの情報を与えてくれたけれど、彼がロシアから逃避した状況やその死を巡ることは、疑問点が付きまとう。プヤティゴルスキーは、論文の脚注で、ローゼンベルグと仏教用語に触れ、こういう。

ローゼンベルグの死には、様々な説明がある。その1つによると、彼はフィンランドの岸辺でボートを漕いでいる途中、溺れた。別なものによれば、大体1921年頃、極東で、寒さ、あるいは発疹チフスで死んだ。第3のものによれば、(より現実味がある)バヴロヴスク〔サンクトペテルスブルグ近郊の郊外に自宅〕で、1921年頃死んだ。

更に、ミカジロヴァとシェルマの記述は、ローゼンベルグの死の記録として、1919年、9月26日を挙げる。一方、バイエフとシチエルバツキーによると、2ヵ月後の11月26日である。(前掲注(9)のバーロー論文 p.59)

このような記述を見ると、このローゼンベルグ未亡人の手紙の価値がよく理解出来るのである。また、前掲注(5)の小林論文 p.93 参照。ローゼンベルグの死亡状況の混乱の有様は、後で本文に載せた渡辺棟雄の記述振りなどからも知られる。年月日は明らかではないが、1昔前の大仏教学者、木村泰賢にも以下のような事実と反する記載がある。

ローゼンベルグ氏は不幸^{フランク}芬蘭において斃れたのは西洋における斯学研究のため痛

惜に堪えないことであるが、…（木村泰賢『木村泰賢全集 第五卷 小乗仏教思想論』（オンデマンド版）平成3年 rep.of 昭和43年、p.70）

- (12) 前掲注(8)の『宗教研究』pp.110-111
 (13) 池田の母親との交流は、前掲注(5)の小林論文 p.88 でも触れられている。
 (14) 『大正新脩大藏經』出版等を行い、日本近代仏教学の草分け的存在である高楠順次郎は以下のように追悼する。

予が希臘印度の漫遊を終つて歸朝せし時、ローゼンベルグ君既に東京帝國大學に入り佛教の研鑽に従事しつゝあり。學期の終り毎に自ら日本語にて書したる報告を携帯し、且、詳密にその研究の現状を語るを常とせり。その間、自己研學の副産物として世に公にせしもの二書あり。その五段排列漢字書に於ては、自ら漢字の搜索に苦しみ、その發見せる便法により漢字を排列し、斯學に貢献せんとせしものにして、外人中にはその便を感ぜるもの至つて多し。而してその佛教研究名辭集に至りては、君が日本佛教の研究に於ける苦心の結果を登録せるものにして、今現に歐州の佛教學者をしてその廣益を感ぜしめつゝあり。この二書に依つて見るも、君が恒に自ら進んで開拓したる方域は、必、後進をしてその岐路に迷はしめざらんことを期せし事實を認め得べし。その俱舍論の全譯成らざりしは、歐州仏教學界に取り、償ふべからざる損失なりと雖も、この二篇の遺書は學界に於ける好箇の記念碑たりと謂ふべし。聞く所に依れば更に佛教哲學に關する著書あり。未亡人之を譯成せんとしつゝありと云ふ。秀で、實らざりし君を悼むと同時に、その短生涯に於ける學問上の努力を感謝せざるを得ざるなり。（大正九年六月一日）（前掲注(8)の『宗教研究』p.109）

また、浩瀚なる『印度哲學研究』等の業績で、その後の日本のインド学・仏教学に先鞭をつけた、宇井伯壽はこう述べる。

オトー・ローゼンベルグ氏が、露西亜に歸つたのは大戦争が始まつてから多少の後かと思ふ。當時余は居なかつたので其事情に暗いが、再び我國に来ることを期して居られたといふ。歸國後、氏の本國はあの状態になつたので氏の左右が如何であるかは氏を知るものゝ間で常に話頭に上つたが、二三日前に氏が我國に来らむとして芬蘭土まで出て、遂に其地に客死したことを聞いて驚いた。予が氏を知つたのは氏が東京に來られて間もない頃であらうと思ふが、多分大正元年頃の夏であつたと思ふ。爾來暫くの間、知人として交際し互に教へ教へられたこともあつたが其當時氏は因明入正理論を研究して居られたのでよく質問に出遭ふた。氏が俱舍論専門の學者であつたことは氏を知るものゝ凡てが知る所であるが、俱舍論研究に就いては非常な熱心で常に良師を求めて居られたから、論の説に關する質疑の或點を解消する爲には、態々斯道専門の學者を諸所に訪問せられる程で、予も一度は梶川乾堂師の許に案内した事もあつた。氏の學門について予は深くは知らないが着實眞摯な學者的態度の人であつた事は、氏を知る何人も疑はない所である。氏は故國は勿論獨・佛・英・白・其他一般から認められた學者で造詣も深かつたに相違ないが、今圖らずも其訃報を耳にして痛恨に堪へない次第である。歐州一般の東洋學者が佛教教理を知らむと驥望している際、氏の如き學者を失ふ

たのは佛教の爲にも將又、歐州學者の爲にも惜みても餘ある事である。氏の人格・経歴・學問其他の事柄については夫れ—氏をよく知る人々によつて、傳へられるであろうが、予は此等をよく知らないのを遺憾とする。(前掲注(8)の『宗教研究』pp.109-110)

ここで、名前の挙がっている梶川乾堂には、『俱舍論大綱』(1908)なる著書がある。宇井と同じ曹洞宗に属す僧侶なので、紹介の便が取りやすかつたのであろう。『仏教哲学の諸問題』には、典拠目録が掲載されている。そこには、梶川の『俱舍論大綱』が示され、以下のようなコメントも付加されている。

重要な術語表を附した俱舍論の精要。定義の選択は巧妙になされている。講義の時の精要たらしめることが著者の目的。(前掲注(3)の佐々木訳本 p.295, *Der probleme des buddhistischen Philosophie*, p.272)

ローゼンベルグの評価は当たっているようだ。梶川自身の言葉が、それを保証している。梶川は、次のようにいう。

阿毘達磨俱舍論は小乗仏教の一大根幹にして、古来、『唯識三年俱舍八年』と称し、これが研鑽に多大の力を費したりき、しかれども、巻秩浩瀚字句難解、加ふるに必修の学芸、日に多きを加へ、今や力をこれに専らにするを得ざるの憾無きにあらず。…従来、俱舍論の大綱を述べたるもの『有宗七十五法記』『七十五法名目』等の著あるも、初学者に取りては、猶ほ是れ複雑難解たるを免れず、是れ実に教界の一大欠点なりと云はざるべからず。…不肖教鞭を曹洞宗大学、天台宗大学に執ること多年、此の欠点を感じることます、太だし。仍て自ら揣らず、本書を著し、以て、各宗中学程度の教科書及び初学者の参考に供えんとす。固より完璧を以て自ら許すものにあざざるも、従来の欠陥を補ふに於ては、小補無くんばならず。…本書稿成て之が校閲を斯学の泰斗黒田真洞老師に請ふ、老師快諾、厳格なる是正を加へ、且つ懇切周到なる注意を与へらる、是れ深く著者の光榮とする所なり、茲に特に記して感謝の意を表す。(梶川乾堂『俱舍大綱』明治41年、pp.1-2, 一部現代語表記に改めた)

また、宇井の記述には、ローゼンベルグが『因明入正理論』を研究していたとの指摘があるが、『仏教哲学の諸問題』では、それを生かしていないようである。序文には、次のようにあるからである。

仏教に於て極めて大きな役割を演じている論理学と認識論の特殊問題は本書では探求されていない。というのは其等は仏教の論理学と認識論に向けられているスチエルバトスキー教授の問題史的著作の中で既になされているからである。中国文献はインド論理学について極めて重要な資料を含む。然し、論理学的問題の探求は本書の課題には属していない。(前掲注(3)の佐々木訳本 p.10, *Der Probleme des buddhistischen Philosophie*, p.XIII)

ただ、因明関係の日本の著書を典拠目録に挙げている。それは、村上專精『因明学全書』(1891)と宇井伯寿『論理概論』(1914)である。(前掲注(3)の佐々木訳本、p.300, *Der Probleme des buddhistischen Philosophie*, p.276)

ところで、中国・日本では、因明研究は、シャンカラスヴァーミン (Śāṅkarasvāmin)

の『因明入正理論』中心である。つまり、ディグナーガ (Dignāga) やダルマキールティ (Dharmakīrti) を中心に据えた、インドの正統的研究スタイルは、中国・日本では採用されなかったのである。この辺の事情は、シチェルバツキーが手短かにこう述べている。

彼〔ディグナーガ〕の著書『集量論』は、中国・日本では知られないままであったのは注目すべきである。それは、シャンカラスヴァーミンの著書『因明入正理論』に取って代わられたのだ。…先に言及済みの小論で、ワシリーエフは、中国の因明家は、伝聞のみで、『集量論』を知っていたと論証した。(F.Th.Scherbatsky, *Buddhist Logic*, vol.1, 1962, rep.of 1930, p.33 の notes5)

この記述を受けて、渡辺照宏は、こういう。

玄奘の伝えた学問のうちでは特に因明が弱かったと思われるが、陳那〔ディグナーガ〕の「集量論」の名を知りながらこれを捨てて「正理門論」で間にあわせたことは遺憾である。(渡辺照宏「玄奘訳「因明正理門論」について」『渡辺照宏仏教学論集』昭和57年、所収、p.52、〔 〕内私の補足)

このように、渡辺は、玄奘の因明に批判的である。それはともかくとして、宇井の『印度哲学研究』第5巻(昭和4年)所収の「因明正理門論解説」という論文には、『因明入正理論』を含む研究史が詳細に綴られている。それによれば、中国の因明事情は、シチェルバツキーの説明とは、幾分、違う。宇井は、こう述べている。

蓋し陳那〔ディグナーガ〕は所謂新因明の完成者であり、そして其方面の著書は集量論 (Pramāṇa-samuccaya) であることは既に玄奘の時に支那に知られたのであり、玄奘は印度に於て數々因明を學修し、因明論三十六部を將來した程であるから、其中には確に此論も含まれて居たに相違ないと推定せらるるに拘らず、遂に譯出するの暇なく、次で義浄が景雲二年(七一)に因明正理門論觀總論頌と共に一度譯出して四巻となしたと傳へらるるも、惜しい哉開元録の出來た開元十八年(七三〇)には既に散逸したと見えて失本とせられて居る爲に、支那に於ても此論を研究したもの殆どなく、…(『印度哲学研究』第5巻、p.507、〔 〕内私の補足)

先のシチェルバツキーの言からも伺えるように、当時のロシアでは、中国の因明研究は盛んであった。宇井は、ロシアの研究事情にもよく通じ、因明研究史を説く中で、次のように述べている。

正理門論と入正理論との同異并に著者に関して最近一般の學界に於て相當に論ぜられたものが存する。入正理論の梵本は有名な耆那教徒ハリバドラ (Haribhadra) 并に其他の人の註釋と共に耆那教徒の間に保存せられて居つて、…然し之を初めて注意しそれを寫取つて出版せむと企てた最初の人は露西亜のミロノフ (Mironov) 氏である。氏は既に一九一一年に「陳那 入正理論とハリバドラの其註釋」と題した一論文を印度ベナーレス發行の一雑誌に公表し (Dignāga's Nyāyapraveśa and Haribhadra's Commentary on it, Jaina-sthāna, dīvalī-issue, 1911) たが、…(『印度哲学研究』第5巻、p.526)

更に以下のような記述もある。

一九二六年に露西亜の學士院學報にツビアンスキ氏の「ニヤヤー・プラゾーシヤの著作について」なる論文が公表せられ、予は其別刷の寄贈を受けて之を知るを得た(M.Tubianski, On the Authorship of Nyāyapraveśa, Bulletin de L'Academie des Sciences de L'URSS, 1926, pp.975-982)。『印度哲学研究』第5巻, p.528)

このように、ロシアの因明研究の様子が見えてくれば、ローゼンベルグの関心の由来も推測がつくであろう。もっとも、ローゼンベルグの目指すものが、最終的に『俱舍論』経由の『成唯識論』にあったとすれば、因明を研究対象とするのは当然であろう。深浦正文は、そのことを伺わせるような記述を残している。

殊に唯識にあつては、その根本論典といはるゝ『成唯識論』の譯出を、譯者玄奘が終始因明の作法に則つてなせることとて、その研究に因明の智識を缺いては果たされぬことになつてゐる。(深浦正文『俱舍學概論』2012, オンデマンド版, p.298, rep.of 1951)

同趣旨のことは、次のようにも、いわれている。

〔『成唯識論』の〕それを行れる文體が、印度論理の形式たる因明(Hetuvidyā)の作法に則れる玄奘入念の意譯とて、その文義の甚深難解なる、多數佛典中その比を見ざるところのものである。(深浦正文『唯識學研究』下巻 教義論 2011 オンデマンド版, p.70, rep.of 1954, [] 内私の補足)

因明の重要性を垣間見させるような伝承も伝えておこう。袴谷憲昭氏は、次のような逸話を紹介している。

〔玄奘の弟子〕基が密かに師より『成唯識論』を講じてもらっているのを円測が盗聴して『成唯識論』に対する註釈を先に作ってしまった、先を越されて落胆した基に向かって師は「測公(円測)は疏を造ると雖も未だ因明(論理学)に達せず」といって基のためにディグナーガの論理学書を講じてやった、(袴谷憲昭「佛敎史の中の玄奘」、桑山正進・袴谷憲昭『人物 中国の仏敎 玄奘』1981, 所収, pp.332-333, [] 内私の補足、同様の話は、深浦正文『唯識學研究』上巻 敎史論, 2011, オンデマンド版, rep.of 1954, pp.247-248 にも載っている)

余談ながら、玄奘とダルマキールティのことを考えてみたい。玄奘は、果たして、ダルマキールティのことを知っていただろうか。極最近刊行された世界的ダルマキールティ研究者シュタインケルナー(E.Steinkellner)氏の著書には、ダルマキールティ年代論なるものが、付加されている。それによれば、フラウヴァルナー(E.Frauwaller)によって、600-660年説が提唱され、それが広く受け入れられた。その後、リントナー(C.Lindtner)や木村俊彦等により、550-620年説が主張され、現在は、クラッサー(H.Krassar)氏により6世紀中葉とされているということである。シュタインケルナー氏ご自身は、「クラッサーの新たな年代論を認めることには、全くもってやぶさかではない。」と述べている。(E.Steinkellner, *Dharmakīrtis frühe Logik Annotierte Übersetzung der logischen Teile von Pramāṇavārtika 1 mit Vṛtti I*, Introduction, Übersetzung, Analyses, Tokyo, 2013, p.xxix) もっとも、護法とダルマキールティの詳しい比較をなした船山徹氏によれば、「それら〔資料〕を、護法や玄奘よりダルマキールティは前の年代であるとする証拠となすのは、困難を極める。故に、必要なら、何らかの別な証

拠で以って、ダルマキールティの活動期間は再考されるべきだ。」(Funayama Toru, Two notes on Dharmapāla and Dharmakīrti, JINBUN35, 2001, これはネットで披見出来る)なのである。ともあれ、斯界の権威シュタインケルナー氏によれば、ダルマキールティは6世紀中となる。さて、玄奘は602-664年に生きた人で、629-645年に渡って、有名な旅行を行っている。年代的な面からすれば、玄奘がダルマキールティを知っていても不思議ではないはずである。大分以前の著作ではあるが、袴谷憲昭氏は、フラウヴァルナーの年代論に順じて、こう述べている。

彼〔ダルマキールティ〕の年代は、フラウヴァルナーの説によれば、玄奘が彼に言及せず、義浄（前述のごとく咸亨四年（六七二）末あたりから約十年間〔インド仏教の中心地〕ナーランダーに滞在、フラウヴァルナーは六七五-六八五年滞在与みる）が近時のこととしてその名声を伝える（『南海寄帰内法伝』巻第四）ことから、六〇〇-六六〇年と推定されているが、これは玄奘の生存年代六〇二-六六四とほぼ重なり合う。ダルマキールティはナーランダーにいた人であるから、玄奘がその滞在中に二年先輩の彼のことを知らなかったというのも不思議な話なのだが、中には、ダルマキールティの名を記すと師の栄光を傷つけることになるという玄奘の伝記作者の配慮からであって、実際には玄奘よりもかなり先輩で名声も早くから高かったとする説もあるほどである。それはともかく、玄奘がディグナーガのみならずダルマキールティに接近した説にも通じていたことは、彼の訳出典籍である『成唯識論』や『佛地経論』によってうかがい知ることができる。（袴谷憲昭「佛教史の中の玄奘」、桑山正進・袴谷憲昭『人物 中国の仏教 玄奘』1981, 所収, p.241）

袴谷氏のご指摘からも、謎は深まる。ともあれ、玄奘がダルマキールティの名を語ったということは聞かない。そして、ダルマキールティの著作は、その後も、遂に漢訳されることはなかったのである。しかし、ダルマキールティの名は、中国、更には日本にまではっきりと伝わっていた。例えば、平安時代の天台宗僧侶安然（841-915?）には『悉曇藏』という梵語学に関する著述がある。そこには、こうある。

ダルマキールティ（法稱）は、重ねて、因明（仏教論理学）を明らかにした。

（法稱即重顯因明、安然『悉曇藏』、大正新脩大藏経、No.2707, 0376c/10）

これは玄奘の後、インドを訪れた中国僧義浄（635-713）の『南海寄帰内法傳』（大正新脩大藏経、No.2125, 229b/20、宮林昭彦・加藤榮治訳『現代語訳 南海寄帰内法伝 七世紀インド 仏教僧伽の日常生活』2004, p.359）の報告をそのまま引用したものである。また、義浄には、こういう記述もある。

〔荊州江陵の人、無行禪師〕彼には先生（法匠）がいて、因明（仏教論理学）をよく理解していたので、度々、評判の講義に出て、ディグナーガやダルマキールティの作品を学んだ。

（彼有法匠善解因明、屢在芳筵習陳那法稱之作、義浄『大唐西域求法高僧傳』、大正新脩大藏経、No.2066, 9b/28-29、足立喜六譯註『大唐西域求法高僧傳』1942, p.180、無行禪師に関しては pp.179-181 に詳しい訳あり）

これらの文献を見れば、中国・日本の学僧が、ダルマキールティについての情報を得

ていたことがはっきりわかる。渡辺照宏も、こう述べている。

法称は玄奘と義浄との入竺の中間の時期に有名になったという仮説が行われたこともあったが、他のいろいろな資料からみると玄奘の入竺の当時に法称はすでに名をなしていたに違いない。(渡辺照宏「玄奘訳『因明正門論』について」『渡辺照宏仏教学論集』昭和57年、所収、p.52)

ここにいう仮説とは、例えば、以下に示す。宇井伯寿の説を指すのであろう。宇井は以下のように、述べている。

戒日王の在位の晩年は玄奘の在天の時、此玄奘は法稱のことをいふては居らぬ。玄奘がいぬから其時法稱は尚未だ生れて居なかつたといはむとするのではないが、義浄は明らかに法稱を以て重ねて因明を顯はすと稱讚し陳那と對せしめて居るから、法稱の活動は義浄の入竺よりも少しく以前であるにしても玄奘の時には尚未だ左程に大名があつたのではあるまい。故に法稱の活動期は玄奘の印度を去つた六四三年から義浄の入竺した六七三年の間約三十年である。(宇井伯寿「陳那以前に於ける佛教の論理説」『印度哲學研究』第五卷、昭和4年、所収、pp.481-482)

宇井の説は昭和4年(1924)の出版物に掲載されたものであり、それを批判した渡辺照宏の言は、論文末尾によれば、1959年である。(p.55)

ともあれ、上記のことを勘案すれば、中国仏教界では、意図的にダルマキールティを無視したという可能性も出てくるのである。先の袴谷氏の文章にも「ダルマキールティの名を記すと師の栄光を傷つけることになるという玄奘の伝記作者の配慮」という不可解な指摘があった。私の考えでは、ダルマキールティ無視の先鞭をつけたのが、恐らく、玄奘なのである。ではなぜそうしたのか?揣摩憶測の類でしかないが、玄奘の奉ずる唯識にダルマキールティの思想は、根底で抵触したのではないだろうか?玄奘にダルマキールティの要素が垣間見えたとしても、玄奘としては、それをダルマキールティ説としたいくない理由があったのではないだろうか。そこを追求していけば、中国唯識とインド唯識との相違点が浮かび上がってくるのかもしれない。実際、唯識のヴァリエーションは、多様である。

唯識に詳しい佐久間秀範氏は、次のようにいっている。

中国と日本の法相宗が描いてきたインド瑜伽行派の諸論師(弥勒、無着、世親、無性、安慧、護法、戒賢、陳那 etc.)間の師弟関係や系譜が、実際に表明される思想内容を精査すると、実は矛盾に充ちたものであることがわかる。(佐久間秀範「法相宗所伝のインド瑜伽行派諸論師の系譜の再考」、平成23年度科学研究費助成事業研究成果報告書より、ネットで披見出来る)

1つのアイデアとして、玄奘の『成唯識論』とダルマキールティの『他相續成就』*Santānāntarasiddhi*を比較しながら、周辺を探っていけば、ひょっとすると、何かが見えてくるのかもしれない。また、よく話題に上る玄奘の唯識比量を追及すると、真相に近づけるのかもしれない。何れにしろ、これまで扱ったことのない分野なので、すべては、今後の課題とするしかない。助けとなるのは、これまでの研究の蓄積である。『成唯識論』については、膨大な量の研究がある。また、『他相續成就』には、桂紹隆

氏の訳注研究がある。これは、「ダルマキールティ『他相続の存在論証』—和訳とシノプシス—」という題名で、ネットにて披見可能である。更に唯識比量に関しては、私の拝見したものは、原田高明「唯識比量とインド仏教」『印度哲学仏教学』8、平成5年、pp.145-151、根無一力「唯識比量をめぐる諸問題」『印度学仏教学研究』32-1、昭和58年、pp.124-125、蜷川祥美「『唯識比量鈔』に関する一考察」『印度学仏教学研究』44-2、平成8年、pp.634-636である。更に、唯識比量でネット検索すると、以下のような、師茂樹氏の1連の論文を見ることが出来る。「新羅における玄奘の唯識比量の解釈」、「玄奘の唯識比量と新羅仏教 日本の文献を中心として」、「清辯比量の東アジアにおける受容」、「清辯比量をめぐる諸師の解釈 『唯識分量決』を中心に」。就中、私 が特に気になった意見は、原田氏の次のようなものである。

この独特な推理式、即ち、ダルマパーラからシーラバドラそして玄奘に至る、と考えられる推理式は、唯識自立論証とでも呼べるものであろう。よって、筆者は、この流れを唯識自立論証派と命名したい。そして、この学派のこうした考えは、チベットには伝承されなかったものの、中国に伝承され、日本においても継承され脈々と生き続けたものではないか、と考えている。(前掲原田論文、pp.149-150)

このようなエキサイティングな意見を探求したいのは、やまやまだが、それは、今は叶わない。ともあれ、一切の経緯を省いて、唯識比量なるものを紹介だけしておきたい。伝承では、玄奘がインドで示した唯識論証であるらしい。「真故極成色不離於眼識 宗。自許初三摂眼所不摂故 因。猶如眼識 喩。」がその内容である。主張は何かと理解可能だ。恐らく「究極的には、世間で承認されている色・形〔という物質〕は、視覚という認識を離れては成立しない」(paramārthe lokaprasiddharūpo vinā cakṣurvijñānena na sidhyate。これは私が、勝手に、想定してみたサンスクリットで何ら根拠はない)ということであろう。しかし、理由の部分がわからない。「初三摂」とは何か？すべては、これからの宿題である。

- (15) 前掲注(8)の『宗教研究』p.111。
- (16) 前掲注(8)の『宗教研究』pp.81-82、前掲注(5)の小林論文注26でも渡邊椋雄の名に言及。
- (17) 前掲注(8)の『宗教研究』p.107。
- (18) 前掲注(8)の『宗教研究』pp.106-107、尚、ローゼンベルグがいう船橋氏の所論は、船橋水哉『俱舎の教義及び其歴史』昭和15年、pp.3-7に網羅されているものを指すと思われる。
- (19) 渡邊椋雄『有部阿毘達磨論の研究』昭和29年、序のpp.1-2。渡邊は、アビダルマ研究に関して傾聴に値するような意見も述べている。私は、アビダルマを代表する部派説一切有部(Sarva-asti-vādin)、別名毘婆沙師(Vaiḥāṣika)の名称を若干調べたことがある。その際、『大毘婆沙論』は著述スタイルの面で詳細に過ぎるとは論じたが、その権威を疑うことはなかった(拙稿「『俱舎論』にまつわる噂の真相」『駒澤大学仏教学部紀要』71、pp.238-235)。しかし、渡邊によれば、それは徳川期以降の新説なのである。渡邊はこういう。

徳川時代の末期以降となるや、…大毘婆沙論こそ有部の教義の大成せられた黨の聖典であるとする主張が出て、それらのおよぶところ、現代の佛教學界におけるがごときは、有部の最根本特殊聖典いかん、かくのごときはいまだ全然學的論定をえてはおらず、かくして、實にその最根本問題からがいまなおまつたくさだまつていないという實情にあるものである。(同本、pp.8-9)

さらに、p.43の注(26)には、望月信亭・木村泰賢・宇井伯壽等、同時代の錚々たる学者の名を挙げ、本文では、こう批判している。

要するに全六足・發智七論のごときは、いうならば、大毘婆沙論に對する單なる緒論的な諸存在にもすぎなかつたように見るのが、まさしくわが國最近學界としての同六足・發智七論觀にも他はないのである。これを一ど湛慧以前における三國佛敎史通貫のそれに反省かつ照合するところあれ。何としても瞠目せしめらるのみの變化と稱するほかもないのである。(同本、pp.39-40)

このような渡邊の見解を批判したのが、櫻部建であった。櫻部は、いうまでもなく、現在最高のアビダルマ学者である。近代『俱舍論』研究の曙ともなった、名著で、櫻部はこう渡邊を批判している。

しかし、それだからといって、「六足發智七論」が有部の「最權威的な一団の諸聖典」(渡邊、上掲書〔=『有部阿毘達磨論の研究』〕四四頁)であったとは考えられず、この「六足・發智」という考え方は、特に、有部論書を成立史的に見ようとする場合、余り意味をもたぬものである。(櫻部建『俱舍論の研究 界・根品』昭和44年、p.44、〔 〕内私の補足)

この櫻部の意見が、今日支配的となり、渡邊の意見は忘れられていった。しかし、葬り去って、顧る必要のないものとは思われない。私の念頭には、渡邊のような見解は、毛ほどもなかつたので、刺激的であった。

本稿とは直接関係ないことかもしれないが、渡邊は戦中・戦後にかけて、政府の宗教行政に深く関わっている。その面については、大澤広嗣「日本軍政下のマラヤにおける宗教調査—渡辺栳雄について—」『アジア文化研究所研究年報』42, 2007, pp.19-36、同一「戦後初期の渡辺栳雄—宗教行政と宗教界との関わりから—」『國學院大學日本文化研究所紀要』100, 2008, pp.111-140がある。大澤氏の第2論文には、渡邊評価とも取れるような文言がある。以下がそれである。

仏教学者の手法は、主に經典の思想を中心に研究を行う。しかし、渡邊は、仏教の思想のみならず、内外諸宗教の実態調査を行った特筆すべき存在であったと言えるのである。(p.113)

私の偏見かもしれないが、渡邊のこのような姿勢が、思想一途なローゼンベルグ批判にもつながっているように見えるのである。

- (20) 『現代佛敎』三月號、1925(大正十四年)、p.42、寺坂修一の名は、p.70にある。前掲注(5)の小林論文注27でも寺崎修一の名に言及。私は、寺崎修一という名を知らなかつたので、ネットで検索してみた。それで見る限り、彼の仏教学研究業績がわかる。ネット上で挙げられているものは、1)「仏典疏鈔伝来史考」『仏敎の諸問題』1935-36(岩波)、2)「弘法大師の師主に関する一考察」『常盤博士還曆記念佛敎論叢』1933、

3)『野守鏡考』『文化』第2巻、第2号、1935、4)『国訳一切経印度撰述部3 本縁部四 過去現在因果経 衆許摩訶帝経 仏所行讃』（常盤大定、寺崎修一、平等通昭）1929である。このうち、私が実際に目にした研究は、2)の「弘法大師の師主に関する一考察」『常盤博士還暦記念仏教論叢』1933のみである。そのp.179論文の最後に、「昭和六・七・八於仙臺廣畔莊稿了」とある。ネットでは、また、三木清の『読書遍歴』の中に、寺崎修一の名があることが、確認出来る。こういう記述がある。

一緒に〔ボートの〕組選を漕いだ仲間て哲学方面へ行った者には、後に東北大学の宗教学の助教授にまでなつて惜しいことに病に斃れてしまつた寺崎修一がある。（〔 〕内私の補足）

この寺崎が、ローゼンベルグを訳した寺崎修一のことなのか、確証はない。ただ、仙台という地名が、憶測を呼ぶだけである。ところで、三木と寺崎のいた一高は、ドイツ語教育が盛んであつたことを思えば、寺崎修一がドイツ語を訳すことは不思議ではない。しかし、ネット上の論文情報からすれば、専門領域は異なる。寺崎が、ローゼンベルグのものを訳すのには、それなりの理由があつたであろう。寺崎修一という人は、虚弱であつたのかもしれない。そうすると、早世したローゼンベルグへの想いは人並み以上に募るはずである。それが、訳する動機になつたとも考えられよう。

(21) 和辻のローゼンベルグ批判については、前掲注(5)の小林論文 p.93, p.96 で言及されている。私のローゼンベルグ批判は、拙稿「アビダルマの二諦説—訳注研究・インド編I—」『駒澤大學仏教学部論集』43, 平成24年、p.435の注(2)で簡単に述べた。彼の神秘主義的解釈を、その師シチェルバツキーの解釈と合わせて、批判したものである。以下には、和辻哲郎のローゼンベルグ批判を示しておこう。お気付きの方も多くと察するが、近時、ローゼンベルグへの賛辞ばかりが目立つ。私の管見の範囲では、和辻の論が最も批判らしい批判である。以下に異様に長い引用を示すのも、今のような礼賛風潮を怪しむからである。批判内容を知つて頂くためには、直に和辻の文章に触れてもらうのが1番であろう。和辻はいう。

仏教哲学の体系を法論(Dharmatheorie)として解釈しようとする試みは、現代ヨーロッパに於いては、ロシアの仏教学者ローゼンベルグ(Otto Rosenberg)及びチェルバキヤ(Th.Scherbatsky)によつて代表される。ローゼンベルグによれば仏教の哲学はプラトンの哲学がイデア論と呼ばれる意味に於いて法論と呼ばれねばならぬ。そうしてその法論はギリシャの意義に於けるOntologieとしての形而上学に外ならぬのである。…以上の諸義を通覧すれば第二の意義即ち超越的持者としての法の意義が最も重大でありまた最も多く用いられていることは明らかである。しかもローゼンベルグによれば、この意義はこれまで全然知られていなかった。…かくしてローゼンベルグは、法を超越的持者と解しつつ、仏教哲学の体系が法論であることを主張する。我々はこの年少にして気を負える著者の主張の内にも、まさしく正鵠を得た点の存することを認めねばならない。即ち法の意義が七十五法の体系を解釈し得る意義でなくてはならぬとする点に於いて彼は覆し得ざる確乎たる地盤に立つのである。従つて法を「現象」「もの」とする日本の解釈に対して彼の浴びせた痛烈な非難も、まさしく正当であると云わねばなら

ぬ。一切有部の法論は素朴實在論ではない。日本に於ける伝統的な法の解釈が素朴實在論的なのである。さてそれならばローゼンベルグやチェルバツキーの「法」の解釈はそのままに承認せられ得るであろうか。我々は然りとはいえ得ぬのである。…法は常に實在性を持つものとせられている。そうしてその實在性は、超越的真實在としての實在性であるか、或はその自性が超越的であるところの實在性であるかである。我々はここにこの両者に於ける法の解釈が一切有部の「法有」の立場による解釈に外ならぬことを見出すのである。…しかしながら法の有、即ち法の實在性の主張の立場に立って、かかる主張の生起した場面としての法の概念そのものを規定することは、果たして法の意義を仏教哲学全体の中心概念として明らかにする所以であろうか。法有の主張そのものは法空の主張に対立するのである。この対立は何を意味するか。そこに論争せられる問題は何かであるか。それを明らかにするためにはかかる対立的立場を見渡し得る立場に立たなくてはならない。…そうしてこれらの法論がその初期の発展に達した後に、初めて法の有空の問題が、法の本質についての反省として生起したのである。この反省を通じてのみ法空の哲学としての龍樹哲学は大成せられた。この歴史的発展の段階を顧みずして法を全仏教哲学に規定しようとするのは、畢竟徒勞に終わらざるを得ぬ。法の概念はかかる発展や反省の全体を包み得るものでなくてはならない。ローゼンベルグはかかる発展の唯一の段階に立って凡てを理解しようとしたがために、法有法空の「問題」が何を意味するかを理解しなかつたのみならず、従ってまた彼の立てる段階そのものの、即ち法有の主張そのものの意義を見誤るに至っている。彼の能持自性の解釈がそれである。法が自相或は自性を持つとは、実は法有の主張を現すのであって、法の無自性空を主張する立場を含めての法の定義ではない。自相或は自性に於いて、意味の重点は「自」に存する。法の自立的独自性が主張の核心である。だから普光はいう。「一切の法は各自性を守る。例えば色法はあくまでも色としての性を持ち、受想等の法とはならない。相はこれ性をいうのである。しかしまたこの一体の於いて、性と相との意義が分かれてもいる。自に着目する場合には性と呼ばれ、相關連する他の法に着目する場合には(即ち他に対して自の性格を区別する場合には)相と呼ばれる。この意味においては法の性(本質)がそれぞれ相(特性)を持つのである。しかし他方で法が自性を持つと云われる。その意味に於いては法の相(特性)がそれぞれ性(本質)を持つのである。」かくして七十五法に於ける各の法が、それぞれ特殊の法でもありつつ、しかも他に依存しない自立的な本質であることが主張せられる。法が自性(Svabhāva, Eigensein, An-sich-sein)を持つとはかかる意味の法有の主張である。然るにローゼンベルグは相を現象と解し、普光の「相はこれ性をいう」との註にもとづいて性をも亦現象に外ならならぬとした。そこで法が自性を持つとは法が「おのれの現象を持つ」の意味であり、かかる現象を持つ者は現象の背後なる超越的基体でなければならぬとの彼の主張が成立する。法有とは法の超越的存在である。しかしかかる解釈が普光の註と遠く離れ法有の主張とも相容れぬものであることは明らかであろう。…かくして我々は、仏教哲学を法論とする解

釈に賛意を表しつつも、超越的持者としての法の解釈を拒げねばならない。従って仏教哲学が現象的存在者の他に不可認識的実在者を立てるところの形而上学であるとの主張をも拒げねばならない。…かくして衆生は、その日常生活的に交渉する現実的存在者に於いてかかる存在者をあらしむる「法」を、即ち存在者の存在する仕方を、見ることが出来る。かかる「かた」としての「法」が仏教哲学に於ける法であり、この法の自性と無自性がこの哲学の発展上重要な問題とされたのである。現実的な存在者とその存在の「かた」との他に、なお超越的存在者を認めることは、問題が仏教の哲学に関する限り、原始仏教の時代よりすでに極力排斥せられたところであった。仏教哲学のこの主要性格を無視するならば、この中心問題たる「空」は正当に理解され得ないであろう。（和辻哲朗「仏教哲学に於ける「法」の概念と空の弁証法」〔朝永博士還暦記念哲学論文集〕、1931、pp.3-32）

和辻は、冒頭付近で、ローゼンベルグを「この年少にして気を負える著者」と呼び、小僧扱いしているようにも見える。和辻が「法を「現象」「もの」とする日本の解釈に対して彼の浴びせた痛烈な非難も、まさしく正当であると云わねばならぬ。一切有部の法論は素朴実在論ではない。日本に於ける伝統的な法の解釈が素朴実在論的なのである。」といったり、「かくして我々は、仏教哲学を法論とする解釈に賛意を表しつつも、超越的持者としての法の解釈を拒げねばならない。従って仏教哲学が現象的存在者の他に不可認識的実在者を立てるところの形而上学であるとの主張をも拒げねばならない。」といったりするのは賛意を表するが、和辻の解釈にも多分に不可解な面があり、全面的には受け入れられない。私の見るところ和辻の最大のネックは、「空思想至上主義」、「大乘至上主義」にある。また、「ローゼンベルグによれば仏教の哲学はプラトンの哲学がイデア論と呼ばれる意味に於いて法論と呼ばれねばならぬ。そうしてその法論はギリシャ的意義に於ける *Ontologie* としての形而上学に外ならぬのである。」という。元々が西洋哲学者であった和辻には特に気にかかる言及であったろう。しかし、ローゼンベルグの主張の真意は別なところにあったのかもしれないのだ。西洋的な切り口をインド思想理解に持ち込むことは、師シチュエルバツキー（F. Th. Scherbatsky, 1866-1942）が深い懐疑を以って戒めたところである。例えば、ロシア仏教学者の列伝『インドのイメージ』*The Image of India* には、こういう記述がある。

その時代、多くの学者は「東洋哲学は、哲学史から排除されるべきだ。」東洋である限り「哲学的確認は起り得ない。」というヘーゲルの意見に与していたのである。シチュエルバツキーの著作は、ヨーロッパ哲学とインド哲学との比較を試みているけれど（当時ヨーロッパで流行していたカント哲学を含めて）、本質的に、ヨーロッパ至上主義者のインド思想研究に正面から対抗しようとしていた。（G. Bongard-Levin, A. Viginin: *The Image of India, The Study of Ancient Indian Civilisation in the USSR*, 1984, Moscow, p.130）

また、『ローゼンベルグとロシア仏教学へのその功績』所収のタチアナ・イェルマコフ「ロシア仏教発展の前後関係におけるローゼンベルグ」では、こうもいわれている。

宗教研究について、シチェルバツキーは西ヨーロッパに浸透していた方法論を拒絶した。ドイツの古典哲学が進めた枠組みをも批判した。即ち、宗教の特性とは神の存在であり、宗教的道德の基盤として魂と自由の教えがある、というものを否定したのである。シチェルバツキーは、その3者は仏教には当てはまらないが、それでも仏教は世界宗教であることを示した。この業績が、ヨーロッパ中心の発想に強烈な打撃を与え、西欧における宗教的生活現象分析への理論的・方法的アプローチに変革をもたらしたのである。(Tatyana V.Yermakova; Otto O.Rosenberg in the Context of the Development of Russian Buddhology, Karénina Kollmar-Paulenz and John S.Barlow ed., *Otto Ottonovich Rosenberg and his Contribution to Buddhology in Russia*, 1998, Wien, p.7)

シチェルバツキー自身、インド仏教の代表的部派を考察するに当たって、こう呟いている。

説一切有部とその反対者との争いは、我々の実在論と観念論という概念にはほとんど無関係な問題について、全く異なる面で行われたのではないか。(Th. Stcherbatsky, *The Central Conception of Buddhism and the Meaning of the Word "Dharma"* 1923, p.4, ll.26-29 金岡秀友氏の訳本『小乗仏教概論』、昭和38年、p.12 参照。)

ローゼンベルグが、このような師の考え方を継承したのなら、安直に西洋哲学者流の思考パターンを持ち込みはしないであろう。この点で、注意を要するのである。更に、もう1つ前掲注(9)のパーロー論文には、『仏教哲学の諸問題』の論文審査会で、それを批判した学者がいたことが紹介されているので、ここで、その顛末を抜粋しておこう。

特に、アレクセーエフ教授は、強く批判しました。その意見は「本自体はよろしい、だがよき博士論文ではない。博士論文では、先ず、テキストの基本的かつ適切な考察があるべきだ。ローゼンベルグの博士論文には、興味深い一般的概説と仏教への解釈は、確かにある。けれども、厳密な文献学的方法に則った資料の準備段階的な処理は、明白ではない。」ローゼンベルグは、この批判に見事に反論しました。それどころか、著書は外からは大いに讃えられ、学部は彼に、修士と博士の2つの称号を授与したのです。このようなことは、学部の歴史でも稀なことでした。(p.52、この記述はシチェルバツキーの「ローゼンベルグ教授：伝記的スケッチ」Prof.Dr.O.Rosenberg: Eine Biographische Skizze の英訳からのものである。)アレクセーエフとは恐らく、V.M.Alekseev (1881-1951) のことであろう。

彼については、次のような記述がある。

彼〔アレクセーエフ〕は1910年に中国語のコレクションと蔵書の体系的な整理及び補充を開始した。S.F. オルデンベルグ〔S.F.Oldenburg, 1863-1934〕は、V.N. アレクセーエフの仕事の意義を評価して次のように記している。アジア博物館における彼の活動は「おもに、博物館の印刷物および写本の中国語部門の体系化にある。この部門は、1913年までに様々な形で博物館に将来された。あるいは博物館が、おもに受動的に、博物館のイニシアティブなく、また建物の壁の外に出て探索することなく手に入れた中途半端なコレクションから成り立っていたのであ

る」V.N.アレクセーエフの尽力のおかげで、中国・日本からアジア博物館へと、大量、かつ内容的できわめて多様な叢書と参考図書が取り寄せられたのであった。1913年10月14日に、V.N.アレクセーエフは、アジア博物館に、中国の古代の都長安（現在の西安）において836年に石碑に穿たれた儒教古典の文面の395本のエスタムパージュ（石刻文から写した拓本）を引きわたした。この将来は、ペテルスブルグ東洋学研究所の拓本コレクションの核となり、今では1000枚を数えるにいたっている。まさにこのV.N.アレクセーエフが、それまで一緒に保管されていた中国語の木版印刷物と写本とを区分したのであった。彼の体系的な仕事のおかげで、アジア博物館のコレクションにおいては、中国語木版印刷物フォンド（現在、約4000タイトル）と中国語写本新フォンド（フォンドNOVA、約400タイトル）に分けられている。（I.E.ポポワ「ロシア科学アカデミー東洋学研究所サント・ペテルブルグ支部（SPbF IVRAN）の東洋写本コレクション」（翻訳 野田仁 日本学術振興会特別研究員）『東京大学資料編纂所研究紀要』18, 2008, p.54, ネットで披見出来る、〔 〕内私の補足）

このように、写本資料を厳密に整理する学者であれば、ローゼンベルグに対する上記のような批判も、予想されるであろう。

* 本稿は、拙稿『『俱舎論』にまつわる噂の真相』と題した伝統的研究に関する雑文（『駒澤大学仏教学部紀要』71）の続編である。そこでも述べたが、伝統的『俱舎論』研究の実態について、私の知識はあまりにも乏しい。それ故、関連資料の見落としは、当然、危惧されることである。願わくば、私の遺漏を補って下さる識者のご叱正をお願いしたい。その上で、再度、伝統的『俱舎論』研究やローゼンベルグを論じたいと思っているが、これ以上、雑文めいたものを記す気持ちも薄いので、学問的に論じようとするれば、それは、当分、先のことになりそうである。また、本稿も異様に長い注を付す等して、体裁のよいものではない。本音をいえば、今後の研究を見据えた備忘録としたいという魂胆もあって、このようなスタイルになった。ご寛恕を乞う。

2013年、初夏脱稿

補記 脱稿後、小林潔「オットー・ローゼンベルグと同時代人たち—その伝記を補う幾つかのトピッカー」（中村喜和・安井亮平・長縄光男・長興進 編『遥かなり、わが故郷—異郷に生きる』III, 2005所収、pp.199-210）という論文の存在を知った。本稿で紹介した荻原雲來等の文章でも言及されていたローゼンベルグの辞書についての資料が、pp.199-204に詳しい。また、池田澄達の文に出てくる近角常観に関する情報が、p.204にあり、妻の手紙にあるエリセエフについての情報も、pp.206-207にある。更に、アレクセーエフのエピソードがp.206に掲載されている。また、p.208の註4によれば、他の資料の存在を示唆している